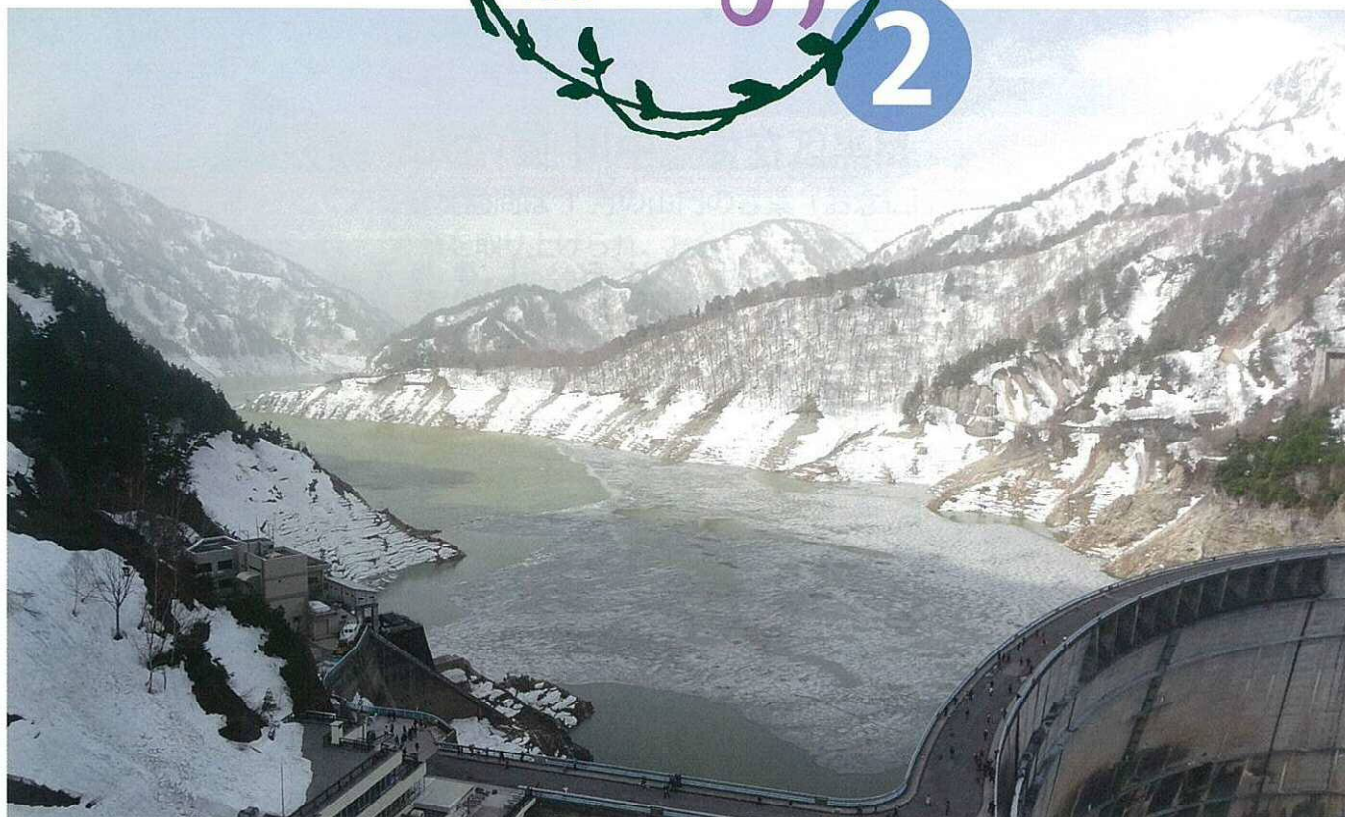


南無阿弥陀仏は
私のいのち



平成26年
2月号

〒110-0012 東京都台東区竜泉 1-20-19
発行所 真宗 佛光寺派 西徳寺
TEL 03-3875-3351 FAX 03-3875-6796
<http://saitokuji.tobihiro.jp/>
発行人 岸本 秀一
印刷 日生印刷(株) 03-6863-3263



人に成る

二〇一四年、新成人となる若者は約一五八万人を数えた。今年も全国各地で成人式が催されたが、一部の会場ではまたもや式典の進行を妨害する行為があったといわれる。

今日でも耳にする「つて言うか!」で始まる若者の言葉は、単なる口癖のようにも受け取れるが、相手の世界と関わることを拒絶し、自分の主張だけを言い立てるという傾向が顕著に表されているように思われる。

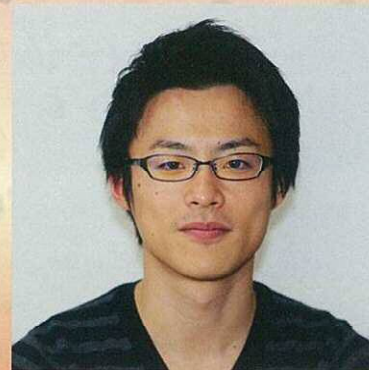
インターネットの登場によって、膨大な情報を誰でも簡単に入手することができ、自分の素性を明かすことなく「仮想空間」の中で友人関係でさえも容易に形成できる環境がある。すべてを自分の意のままにすることで、はたして豊かな人生が築かれるのであろうか。

仏教では成人(人に成ること)を成仏道という言葉で言い表す。それはある年齢に達するこゝとで与えられる権利などではなく、計り知れない世間のしがらみに縛られ、業縁に動かされて生きるといふ事実の中で、人としての生き方を仏の教えに学び続けていく道である。

親鸞聖人は、ご自身を「煩惱具足の凡夫」といだけかれ、仏法によって苦悩の人生を生き抜いて行かれた先達の教えを聞き開かれ、人に成る道を見出されたのである。

人は弱い

目黒区在住 中川 直 さん



今回は私の高校時代の同級生であり、現在裁判所に勤務の中川直さんにお話を伺います。

◆きっかけ

高校生になって初めて学ぶ物理とかに興味があり、理系に進むことを考えたけど、偶々放映された裁判関係のテレビ番組を見て、「なんか法律を使えたら格好ええな」って思ったのが、法律の道を進む最初のきっかけでした。ちょっとした憧れかな。

そして、大学で法律を学びながら、そこでは出来ない仕事に就けたらいいなと思うようになり、裁判傍聴がきっかけで裁判所の仕事をするを考えました。

◆流されない

裁判所事務官として働きだした当初は、交通事故や児童虐待などの関係の事件に携わり、当事者と自分の環境に似通ったところがあると、色々考えさせられました。被害者の辛い気持ちに直接伝わってきて、辛くなったこともあります。

しかし、自分が責任を持って担当するしかなかった中で、先輩から裁判所の中立性とかについてアドバイスをもらい、やっぱり第三者的に見るのが大切なんや

と思いました。

上司である裁判官は知識が豊富なだけでなく、客観的に物事を見て問題点を纏める能力が秀でていると思う。長期的な裁判は体力もいるだろうし、本当に学ぶことが多いです。職業倫理っていうのかな、そういったところも桁外れな感じがする。

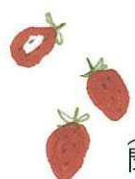
◆人から学ぶ

裁判所に勤めだしてから特に思うことは、人はとても弱い部分があるんじゃないこと。多くの人と関わる中で、強く見える人も実際は弱い部分があって、自分も含めそういうところを認識し行動しないといけないと思う。

もう一つ思うことは、自分自身が加害者・被害者どっちにも成りうるということ。だから、今の自分というのは偶然が重なっているんじゃないと感じます。

今こうやって裁判所の職員としては関わっているけど、多くの人から学び支えてもらって、偶々今こうして真面目に生きられていることが、本当に有り難いと思います。

(聞き手 大橋 伊知郎)



宗教は、救いを求めて一心に祈ることだといわれます。しかし、一心が、自分の心では、どれほど集中しても、打算的な都合頼みに傾いていきます。それではいけないと、みんなのために祈っても、みんなのために祈っているという自惚れがまた残ります。「煩惱をなくすることも、煩惱だしたら、君はどうする」といわれた先生がいますが、人間に一心が成り立つのでありましようか。

天親菩薩は、『無量寿経優婆塞舎願生偈』の冒頭で、「世尊、我一心に、尽十方無碍光如来に帰命して、安楽国に生まれんと願ず」といわれました。親鸞聖人は、この一心に注目され「一心というのは、教主世尊の御ことのりをふたごころなくうたがいなしとなり。すなわちこれまことの信心なり。『尊号真像銘文』』といわれます。それは、人間の無明に目覚められた釈尊の「ただ念仏」のみの教えまでも、ふたごころ（分別して自分流に解釈する心）で、顔こうとしていた自分に頭のさがることが、まことの信心であると受け止められたからです。それで、一心は、阿弥陀仏の心に出遇

つて、自分の狭い心や決断の心がひるがえされることだといわれます。こうして、お念仏の信心を「一心に、尽十方無碍光如来に帰命」とすると告白された天親菩薩のお姿に、



正信偈の話 ③〇

松井 憲一

広由本願力回向 為度群生彰一心 帰入功德大宝海 必獲入大会衆数

（広く本願力の回向に由りて、群生を度せんが為に、一心を彰す。
功德大宝海に帰入すれば、必ず大会衆の数に入ることを獲）

心を宣布して、普遍く雑染堪忍の群萌を開化す（『教行信証』）と、欲望に汚染され悲しみに暮れるわれらを救うために、一心と彰してくださいと讃嘆されます。

この一心に開

かれる世界を、「功德大宝海に帰入すれば、必ず大会衆の数に入ることを獲」といわれます。功德といえは、自分がよい行いを積んでよい結果がくることだと思いがちですが、聖人は「功德」ともうすは、名号なり（「一念多念文意」）と、お念仏が名告りでてください、お念仏する身に

感動された聖人は、「広く本願力の回向に由りて、群生を度せんが為に、一心を彰す」と阿弥陀仏の広大な信心にふれたことを喜ばれ、また「論主（天親）は広大無礙の一

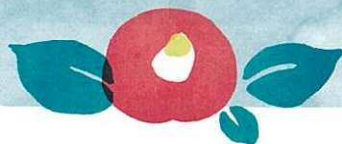
かにとくみちたりぬとしらしめんとなり。しかれば、金剛心のひとは、しらず、もとめざるに、功德の大宝そのみにみちみつるがゆえに、大宝海とたとえたるなり。（同）」といわれます。

つまり、わたしたちが、知って求める功德は、「苦勞した ローンの家に 一人棲む」「孫のヤツ あんなに可愛 がったのに」と、苦しみを深めていく不実の功德です。今ここで、鳴らん太鼓は、どこへ行っても鳴りません。お念仏の功德は、「すみやかにとくみちたりぬとしらしめんとなり」といわれるように、足下に満足を感じる功德です。わが思いを超えて「しらず、もとめざるに、そのみにみちみつる」と、身に受けている現在をすべて意味あるものとして、「もったいない」と頂けるのが、功德の大宝なのです。それで、「功德大宝海に帰入すれば、必ず大会衆の数に入ること」を獲といわれます。「必ず大会衆の数に入ることを獲」とは、大会衆、よき友、よき師の仲間になぜ入ることです。お念仏において、御同行、御同行を賜り、御同行、御同行によつて、聞法を深めお念仏のお育てを頂く、それが一心帰命の生活です。

山門の言葉

「当たり前」を疑おう

のぶひろ
山口 信博



この言葉はグラフィックデザイナーの山口信博さんがNHK・Eテレにて仰った言葉である。

山口さんは目録や進物を包む折形おりかたに着目するデザイナーである。折形とは、贈答などの際に紙を折って物を包む日本の礼儀作法の一つである。折形の歴史は古く、平安時代から進物を紙で包み、室町時代では各武家ごとに独自の折形が決まっていたそうである。山口さんは、そんな折形を現代の生活に合うような作品作りを試みている。

さて、先ほどの言葉は「いつもデザインをするときに大切にしていることは？」という問いに対しての言葉である。その例として、紙袋一つを見てみても、デパートで使われる物と魚屋のそれとは、袋の折り目が異なる。ただ山折りか谷折りかという違いだけなのだが、こうすることで大きい魚が取り出しやすいのである。このように普段あまり気にしない折り目一つにも、様々な工夫が凝らされている。それを一体なぜこういうデザインなのかと考えることが大切だと山口

さんは仰った。

「当たり前」と見過ごしていることは、仏法に対しても言えるだろう。「聴聞は大切だ、お念仏を称えよう」と言われ続けると、称えていれば仏法がよくわからなくても、何となく解決してくれると感じる。

しかし、実際はどうだろうか。お念仏を称えても悩みや不満は起き続けてくる。実は仏様の願いは、ただお念仏を称えることを願っているのではなく、なぜナムアミダブツと称えるのかを私に尋ねているのではないだろうか。

お聖教では、日常の様々な事柄を、私達が自分の思いで片付けようとする姿が説かれている。だから、自分の判断ではなく、先人の言葉に尋ねていけとも言われている。ということは、お聖教は人生のアドバイスではなく、様々な事を聞け、と書かれているのではないだろうか。今まで当たり前前に受け取ってきたことを疑う。それは様々な時代や立場の方が常に実践し、私達に何度も伝えようとしていることである。

(高橋淳記)

日誌

12月18日
12月19日
12月21日

婦人会聞法会
『唯信鈔』に聞く(第1回) 講師 宗正元師
定例聞法会
評議員会定例役員会
混声合唱団「エコー」練習
12月27日・28日 宗祖忌
12月31日 歳暮法要
1月1日 修正会(参加者 約25名)
1月7日8日 中興忌
1月11日 混声合唱団「エコー」練習
1月12日 婦人会新年会(参加者 35名)

えこお志お礼

ご浄財を頂戴いたしましてありがとうございます。
ご芳名の掲載をもってお礼とさせていただきます。

川崎市	長安寺 様
青森県	蓮得寺 様
台東区	飯高 多嘉子 様
台東区	大林 藤枝 様
柏市	山本 英男 様

婦人会新年会

青空澄み渡る1月12日、11時より会員33名の参加をもって西徳寺婦人会新年会が開催されました。

本堂にて勤行の後、太田愛子会長より「共に新年を迎えられた喜びとともに、改めて健康の有り難さを感じます。今年も引き続き「釈尊伝」に自分自身を学んで参りましょう」とご挨拶を頂きました。引き続き岸本住職からは駿河ののなどのお話を通して、いかに日頃の私達が頭で物事を考えているかを教えて頂きました。そして大谷最高顧問は1月の山門の言葉「お念仏は請求書ではない領収書だ」(米沢英雄)という言葉を取り上げられ、お念仏の道は要求するのではなく、頂いているものに眼を開く道であるとお話しされました。最後に恩徳讃を皆で唱和し閉会となりました。

その後場所を梅檀の間に移し懇親会となりました。今年は恒例のビンゴゲームの他に、川柳大会が催されました。「お年玉」という上の句のお題を頂きましたが、どれも秀逸な作品ばかりでした。甲乙付けがたい中で選者の岸本住職と婦人会担当山崎は、「お年玉 娘に貰って 倍返し」を特選として選ばせて頂きました。

外の寒さを忘れるくらい大いに盛り上がり、楽しい一時はあっという間でしたが、共に新しい一年のスタートを切れたことを慶び合いお開きとなりました。(山崎哲 記)



出かけて行く聞法会 30周年記念大会!

6月14日(土)午後2時
より、浅草ビューホテルにおき
まして「**出かけて行く聞
法会 30周年記念大会**」
を開催する運びとなりました。

記念大会の詳細につきましては、来月号より誌面におきましてお知らせいたします。参加お申込については、春彼岸までに案内状をお送りいたします。ご家族揃ってのご参加、心よりお待ち申し上げます。

昭和58年5月11日生まれ、30歳です。西徳寺には平成21年1月に入寺し、今年で6年目を迎えることになりました。

さいふくじ
実家は滋賀県守山市にあります西福寺で、3人兄妹の次男です。高校卒業後、オーストラリアに住んでいる知人が縁となって、約4年間海外留学をしていました。帰国してからしばらくして、東京の西徳寺に行ってみないかとお声をかけていただいたことがきっかけで、現在西徳寺でお世話になっています。

東京に来て、あらためて自分のこれまでのことを考えてみると、本当にいろいろな方々とのご縁を通して、今ここにいるのだと思います。

西徳寺では現状として、月参りや年忌法要などで門徒さんのお宅へお参りさせていただく機会は、決して多いわけではありません。法事を勤めることを通して、私というのは両親だけでなく、数え切れないさまざまな縁をいただいて、今ここに存在している。その事実を私共に教えてくださるのが念仏なのです。私たちは、すでに念仏の教えに出遇っているはずなのに、そのことに気づいていないのです。個人では気づくことができない私の身の事実を、門徒さんと共にたずねていきたいと思っています。門徒さんとゆつくり話をする時間をいただくためにも、お宅へ伺って法事を勤めることはとても大切なことではないかと思っています。

また多少なりとも学んできた語学力をいかして、日本だけでなく国境を越えて多くの方々とも出遇える、そんな僧侶を目指したいです。

**職員
自己
紹介**
蓮井 邦宗



掲示板 平成26年2月

- 1日(土) 午後3時半 混声合唱団「エコー」練習
9日(日) 午後2時 城東ブロック会間法会(市川八幡神社)
12日(水) 午後1時 婦人会間法会
15日(土) 午後1時半 定例間法会
午後3時半 混声合唱団「エコー」練習
22日(土) 午後6時 同行会
23日(日) 午後2時 城南ブロック会間法会(馬込 東京イン)
25日(火) 午後7時 仏教青年会座談会
27日(木) 午後1時半 『唯信鈔』に聞く(第2回)
講師 宗 正元師

仏具磨きのお誘い

春の永代経法要をお勤めするにあたって、本堂の
荘厳や会館等の仏具磨き、境内の清掃など、ご門徒
の皆様と共に行いたいと思います。

この度も本山から差向布教のご縁をいただきま
す。皆様と協力して、綺麗なお荘厳でお迎えしたい
と思います。

当日は昼食のご用意も致します。大勢でご参加を
お待ちしております。

期 日 平成26年3月4日(火)
午前10時から(雨天順延)

場 所 西徳寺境内

参加いただける方は2月28日(金)までに
寺務所へご連絡ください。(電話03-3875-3351)



前略 ご免下さいませ。大変お世話様でございます。

昨年の10月、脳血栓で倒れ、右半身マヒが残り、お寺さんに参りま
すこともできず、また7回忌も失礼してしまいました。主人も淋しがっ
ていると思います。

少しでも早く西徳寺様にお参りしたいと、リハビリに励んでいます。
文字もやっと、これ位で失礼と思いながら一字一字、集中して書いてい
ますが、失礼をお詫び致します。(神奈川県・上田 文子 様)

ごぶさたに打ち過ぎて、大変失礼い
たしております。お許し下さいませ。

いつもえこ誌をお送り下さいまし
て、有難うございます。内容が私には
むつかしくて、折角のおはなしをいく
らも理解出来なくて勿体なく存じてお
りますが、こんな私でも「おや」と目
を見張らせて頂き、おはなしに打たれ
ることもございまして、有り難く読ま
せて頂いております。

歳瀬も押しつきました。来年も
よい年でありますように。かしこ

12月30日
西徳寺のみなさまへ
(板橋区・久保田 宏子 様)

前略 例年になく寒波
厳しい中、本年も愈々(いよいよ)
おしつまって参りました。

グローバル化にともない日本人の
考え方、生き方の基準だけではおし
はかられない、思いやりの気持ちが
大切な時代になって来たように感じ
ております。

五十年前に米国に滞在した折に
「日本の人達は宗教なくして何を生
きる為の基準にしているのか」と問
われた事がありますが、今の日本に
必要なものは何か…を真剣に考える
時が来ていると感じております。

(池田市・奥 康右 様)

読者の声

明けまして、おめでとうござ
います。昨年、いろいろと
ご心配おかけ致しました。今
年もよろしく願います。

お寺様にはこれからもご心
配させるかと…淋しい思い
も、今までのことを感謝しつ
つ、前向きにと考えて、出掛
けられる時はと思っています
が、これから主人をお守りし
ながらと、現実、我が身にあ
たえられたこと。これも仏様
からの道だと思ひます。

(北区・小山 光子 様)

編集後記

2月3日は節分の日です。節分とは季節が移り変わる節日を表し、元々は立春・立夏・立秋・立冬、それぞれの前日を指していました。節分が特に立春の前日を指すようになった由来は、冬から春になる時期を1年の境とし、現在の大晦日と同じように考えられていたからだそうです。平安時代の宮中では厄や災難を祓い清める「追難」の行事とされ、室町時代以降は豆をまいて悪鬼を追い出す行事として民間にも定着しました。

親鸞聖人は『和讃』に「南無阿弥陀仏をとなくば よろずの悪鬼をちかづけず」といわれます。厄や災難を鬼として恐れる私の心を照らし出し、業縁の世界に苦悩する私に生きる力を与えてくださるのが南無阿弥陀仏の教えであるといわれています。(主任 木村 記)

西徳寺ホームページアドレス：

<http://saitokuji.tobihiro.jp/>

ゆうちょ銀行お振り込み口座 00120-0-80670 名義 西徳寺

※「えこお」に対してのご意見・ご感想をお寄せ下さい。
(メールでも結構です)

saitokuji@ce.wakwak.com